

地位の非一貫性と階層帰属意識の関係の再検討

——多母集団同時潜在クラス分析を用いて——

日本学術振興会・大阪大学 谷岡謙

1. 背景・目的

近年、階層帰属意識は分布を変化させないまま、その階層性を強めている（Kikkawa and Fujihara 2012 など）。この現象に関して、いくつかの仮説は提示されているものの、明確な説明がなされたとは言いがたい。そこで、本報告では、階層変数と階層帰属意識の直接的な関係を調べるのではなく、潜在的な構造を通じて、この現象を読み解くことを目指す。具体的には、時代をグループ変数として多母集団同時潜在クラス分析を行い、抽出された潜在地位クラスと階層帰属意識の関連の時代変化を検討する。このことは、富永・友枝（1986）の地位の非一貫性の議論を、現代日本において再検討することにも繋がる。

2. 方法

使用するデータは、SSM1985 と SSP-I2010 の男性についてのデータである。使用する変数は、学歴・職業・収入・財産・階層帰属意識である。「時代を通じて地位クラスの構成が等しい」という制約をかけた上で、時代の変化として考えられる4つのモデルを検討した。

3. 分析結果

適合度より4クラス解を採用し、4つのモデルを尤度比検定により比較した結果、「時代によって地位クラスが階層帰属意識に与える影響は異なる」というモデルがもっとも適合的なモデルであることが明らかとなった。つまり、1985年から2010年にかけて、地位クラスの構成は変化していないが、その割合は変化しており、また階層帰属意識との関係も変化しているということである。

各クラスの特徴を読み取ると、クラス1は高学歴を特徴とする非一貫的なクラス、クラス2は高収入を特徴とする非一貫的なクラス、クラス3は下位一貫的なクラス、クラス4は上位一貫的なクラスである。これらのクラスの割合はクラス1が増加、クラス2・クラス3は減少、クラス4はほぼ横ばいとなっており、高学歴化の影響が伺える。この結果に基づき、階層帰属意識の分布を積み上げ棒グラフで表したのが図1である。潜在地位クラスと階層帰属意識の各カテゴリ間の時代による変化を検討したところ、上位一貫層/下位一貫層がより高い/低い階層帰属意識を持つようになっていることが明らかとなった。

4. 結論

以上の分析から2つのことが明らかとなった。1つ目は、高学歴化に伴い潜在地位クラスの割合が変化していること、2つ目は、潜在地位クラスと階層帰属意識との関連が変化していることである。この2つの変化によって、階層帰属意識の分布の無変化と階層性の強まりは生じていると考えられる。

また地位の非一貫性の議論に関しては、富永・友枝（1986）と同様に一貫的なクラスと非一貫的なクラスが抽出され、非一貫的な地位を持つ人びとは依然として「中」意識を持ち、一貫的な地位を持つ人びとの意識が時代とともに変化していることが明らかとなった。

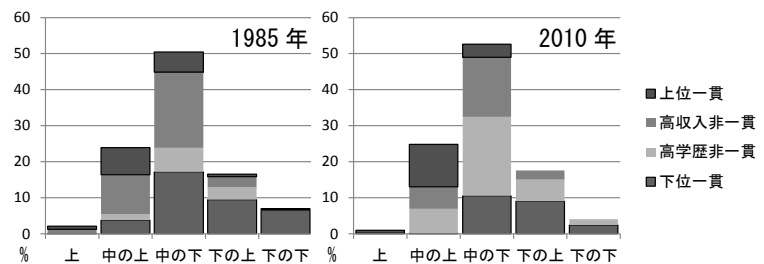


図1 地位の非一貫性と階層帰属意識

【文献】 Kikkawa, Toru and Sho Fujihara, 2012, “Class Awareness in Japan and the U.S.: Expansion and Stability,” *Sociological Theory and Methods*, 27(2):205-224. 富永健一・友枝敏雄, 1986, 「日本社会における地位非一貫性の趨勢 1955 - 1975 とその意味」『社会学評論』 37(2): 152-174.